

2023 年度総会開催—「菜宴」にて

奈良日仏協会の 2023 年度総会を、2 月 11 日（土・祝）、「菜宴」（奈良市小西町）において開催しました。出席者 16 名、委任状 53 名、合計 69 名で、現時点会員総数 96 名の過半数を越えており、会則第 23 条の規定により総会が成立したことを確認。その後、三野会長を議長に議事が進められ、次のとおり議案が承認されました。1) 2022 年度活動報告、2) 2022 年度決算報告、3) 2022 年度会計監査報告、4) 2023 年度役員選出、5) 2023 年度活動計画、6) 2023 年度予算。

2022 年度活動報告では、2020 年から 2 年間にわたり、コロナ禍のもと活動の縮小を余儀なくされていたのが、ほぼ元どおりの形に戻り、理事会の定期開催のほか、フランス・アラカルト 3 回、シネ・クラブ 2 回、ガイドクラブ 2 回、美術クラブ 2 回、秋の教養講座を実施、教養講座の懇親会も久しぶりに復活したこと、会報誌 Mon Nara、Mon Nara 通信も隔月に滞りなく発行したことが報告されました。2022 年度決算は、前年度からの繰越金 1,518,194 円をベースに、今期の収入 381,472 円、支出 353,645 円の結果、次年度繰越金額が 1,546,021 円となったことが報告され、三木監事より、証票がきちんと整理され正しく会計処理がされているとの監査報告がなされました。

2023 年度役員は、前年度と同じく、会長：三野博司、副会長：オリヴィエ・ジャメ、浅井直子、事務局長：杉谷健治、理事：南城守、藤村久美子、中辻純子、高松洋子（会計）、喜多幸子、菌田章恵、監事：三木正義、顧問：坂本成彦、の陣容で取り組むことが承認されました。

2023 年度の計画としては、来年に協会創立 30 周年を迎えるにあたり、記念行事の企画を行うことのほか、文化事業は、コロナの鎮静化を踏まえて、例年同様の回数予定を組み、これに伴う新年度予算が了承されました。（決算、予算の詳細については、折込別紙をご参照ください）。

総会の終了後、今年も立食形式は避け、着席のままケーキとお茶をいただきながら懇談会を行ないました。全員から自己紹介や近況報告、今年の抱負、誓いなどをお話いただきましたが、話題としては、ラジオ講座や読書での日頃の語学学習の研鑽ぶり、ZOOM での国際会議がとても効率が良いこと、しかし深夜になるので分割睡眠法で対処しているという話、国際交流をする際にはこちら側が日本文化を体現していることが大事ということ、芸術活動には大変なエネルギーがいるという苦労話などが印象的で、来年は三野団長のもとに旗を掲げてパリへ！などという発言まで飛び出して、奈良日仏協会メンバーの多彩さをあらためて感じました。（事務局）

《三野会長 2023 年度あいさつ》
「疫病のこの突然の後退は予期しないものであったが、(……) 新しい事態はすべての人びとの話題になり、彼らの心の底には、秘められた大きな希望が高まっていった」(カミュ『ペスト』三野博司訳、岩波文庫)。第五部冒頭の文章です。この希望の高まりは、やがてオラン市民の歓喜へと至りますが、それは 1944 年 8 月ナチスドイツの占領から解放されたパリ市民の高揚を下敷きにしています。物語の中でのペストからの解放と、現実世界での戦争からの解放が重なります。
他方で、2023 年を迎えて、人類はコロナを完全に制圧したとはいえ、昨年始まったおぞましい戦争が終わるきざしも見えず、「大きな希望」の高まりを感じるにはほど遠い状況です。そのような制約の中で、昨年度、奈良日仏協会は、文化は災禍に打ち勝つという信念を保持し、着実に活動を継続しました。本年も継続あるのみです。ご支援をよろしくお願いたします。



《事務局からのお願い》 会員名簿を更新する時期になりました。記載事項に変更のある方は 3 月 31 日までに、下記のいずれかの方法で変更内容をお届けください。1) Mail : sugitani@kcn.jp 2) FAX : 0742-62-1741
3) 郵送 : 〒630-0224 生駒市萩の台 3-2-13 杉谷方 奈良日仏協会事務局 ※ お名前以外の掲載事項は自由に選択することができますので、掲載項目を変更したい方はその旨ご連絡お願いたします。

総会に参加して

★今回初めて総会に参加させていただき、役員や会員の方々と直接お会いすることができました。皆さまは、語学学習、音楽活動、エクササイズ、パリへの旅行計画など、色んなことにとても意欲的でいらっしゃいます。私も皆さまを見習って、最近怠っていたフランス語の勉強を再開することにいたしました。普段、小さな事務所で誰とも会わずに過ごしている私にとって、おいしいケーキをいただきながらの1時間半は、あっという間でした。(竹中美穂子)

★総会後半はティータイムで意見交換。個々の会員のみなさまの日仏交流に尽力された活動や、専門の道一筋のキャリアを敬服しながら聞きました。外国人は自国の文化をよくしゃべる、私たちも自国の文化を知らなければ交流にならないという意見が心に響きました。有志が残って「菜宴」おすすめのワインで乾杯。美酒に酔うほどに参加者の人生遍歴のお話になりました。高千穂からアルザス、イタリアへ、サマルカンド、奈良へ。さらに、東征、シルクロード、金沢、鹿島神社、ユダヤ教、物部氏、ナガスネヒコ、額田王などが飛び交い、地名や人物がつながり物語が編集されていく語りが面白く、学ぶことが多すぎて聞き逃したこともいっぱいありそうです。クライマックスは、富雄丸山古墳から出土した盾形鏡と蛇行剣には魂消たなあ、と全員で熱く盛り上がりました。古来より交流に美酒は欠かせないものです。(小林安貴子)



竹中さんと小林さん

法人会員紹介

株式会社 NARAFRANCE

<https://www.narafrance.com/>

2020年5月に、奈良県生駒市に日仏通訳・翻訳、日仏ビジネスサポートの会社、株式会社 NARAFRANCE を起業いたしました。当方が17年間勤めていた在日フランス大使館での経験を活かし、これまで約2年間のコロナ禍では、オンラインでの商談通訳やオンラインセミナーでの司会、通訳を中心に活動しておりましたが、2022年夏以降、関西に来日するフランス語圏の企業や団体の商談、面談通訳や会議通訳の手配を実施しております。また、信州大学と高知大学でフランス経営学やアントレプレナーシップ(起業家論)の講義を実施し、現在は月に一度、学園前の「住まいと暮らしのぷらっと HOME」で「あいさつからはじめるフランス語講座」を開講しておりますのでご興味がある方はぜひお気軽にメールにておたずねください。



連絡先: kaoruko.hayashi@narafrance.com
 所在地: 奈良県生駒市 代表: 林薫子
 写真: 2022年6月フランス出張にて

野菜ダイニング「菜宴」

<https://potager-rice.com/>

スープで食べるご飯『ポタジェ・ライス』の誕生から早くも2年が経ち、おかげ様で2022年ソーシャルプロダクツ賞を受賞しました。その後、アメリカ、ブルックリンで展示会に出品したり、シンガポールの通販サイトでの販売開始や地方自治体より非常食に採用されるなど、ジワリジワリ手応えを感じております。そんな中、2022年7月に完成した新商品、炊飯器で作るパエリアの素『パエー釜ジャ』です。パエリアの素は直接サイトでご覧下さいませ <https://paella.official.ec/>。商品は奈良県内の郵便局「ふるさと小包」でも販売しておりますので、応援購入いただけますと幸いです。



パエー釜ジャ購入サイト



パエー釜ジャ QR

奈良市小西町19
 マリアテラスビル 2F
 Tel: 0742-26-0835 不定休
 昼 11:00~15:00
 (14:30 ラストオーダー)
 夜 17:00~22:30
 (21:30 ラストオーダー)
 店長: 久保田耕基

※法人会員ワインショップ「サン・ヴァンサン」の紹介は、6月号に掲載予定です。(編集部)

2022 年度秋の教養講座「大西弘さん講演会」(10/9) 報告

◆◆10月9日(日)、秋の教養講座が2年ぶりに開催され、講師の大西さんを含め、講演会には25名、懇親会には15名が参加しました。大西さんのお話のなかで印象的だったのは、フランスでクレームの嵐の地獄を味わった後、ベルギーで万事順調の天国、またフランスでバブル崩壊後の地獄を体験したという波乱万丈の仕事ぶりでした。私も会社に入ってしばらく営業をしていたので、大西さんほどのスケールはないですが、いくら努力しても成果が上がらないときもあれば、うまく歯車が回り始めると、不思議なほどいい方向に転がっていくという一喜一憂の浮き沈みを体験しました。定年後も新しい活動に取り組み、ますますネットワークを広げられている様子を見て、未来へ向かう姿勢を学ばねばと思った次第です。3年ぶり開催の懇親会では、参加者一人ずつが自らの経験を思い出したりしながらスピーチし、飲み放題も相まって、大いに盛り上がり、久しぶりに皆で飲む楽しさを味わいました。(杉谷健治)



◆◆講師の大西弘氏は、松下電器貿易の社員として現地販売会社設立のため、フランスとベルギーに通算16年間滞在された方で、今回はその経験談を披露されました。フランスに最初に赴任した時には消費者のクレームに苦しみ、再び滞在した時は、3年間の絶頂期を経てバブル崩壊で経営不振に陥り「短期間に天国と地獄を味わった」とのこと。ベルギーに赴任した時は、少人数の会社で社員旅行など日本的経営を行い、社員たちに歓迎されたこと、これまで「猛烈社員」であったのが、家庭という「新たな価値観」に目覚めたことをお話されました。海外生活を体験されて、多角的な視野に立った世界観を持たれていることに感銘を受けました。フランス語専攻卒だとフランス語が流暢だと誤解されて困ったというのは、仏文専攻の私にとっても身につまされる話でした。聴衆一同、波瀾万丈のお話に引き込まれて2時間があっという間に過ぎ、懇親会でも海外の様々な話題で盛り上がりました。(村田京子)

◆◆講師の大西さんとは日頃お付き合いがあり、断片的にはフランス駐在時代のご様子を伺ったことがあります。しかし、フランス語の世界へ入られた経緯と通算22年に及ぶ海外勤務の実態については、よく知りませんでした。今回のご講演で、これらを理解しただけでなく、実体験から語られたフランスとベルギーにおける国民性や習慣などの違い、さらにはアメリカ人とフランス人の代表的な気質の違いについて納得しました。お話の中で最も印象に残ったのは「地獄と天国の両方を体験した」ということ。特に最初のフランス駐在における業務の実態は、常識では想像できないほど壮絶なものだったようです。当時の日本経済がこのような苦難に満ちた製品輸出によって支えられたことを想像しました。それに比べ私が経験した外国生活(4ヶ国、合わせて6年)は、今思えば「天国」のような恵まれた条件下、辛かったことなどほんの僅かで、思い出すのは楽しかったことばかりです。いずれにせよ、外国で暮らし異文化を直接体験することは、人生観に影響を及ぼし、真に豊かな生き方を見出すことにつながります。会社退職後に大西さんが参加されている国際交流とご活躍ぶりは素晴らしいと思います。ご講演の後に催された懇親会を含め、実りある楽しい半日をありがとうございました。(濱 恵介)

◆◆秋の講演会での演題として、「フランス語と共に歩んだ道」というテーマでお話をさせて頂く機会を頂きました。これは私が会社時代に約16年間フランスとベルギーで勤務した経歴があった為、現地における色々な経験から学んだ事とか感じた事などを話してほしいという趣旨からでした。私は学生時代にたまたまフランス語を専攻していた事もあり、大学で学んだフランス語と実用フランス語のギャップの大きさに苦しんだ経験談を赤裸々に話させて頂きましたが、長い現地生活の中で感じた事や印象に残った出来事が余りにも多く、語りだすとついつい深入りし過ぎて、時間内に予定していたテーマを全てカバーできなかった事を少し反省しております。ただ、終了後の夕食懇談会で参加された方々と楽しく語り合う事が出来ました事は何よりの大きな喜びであり、慰みとなりました。この機会を与えて頂いた事に心から感謝申し上げます。(大西弘)



1990年ツール・ド・フランスで、パナソニックがオランダチームのスポンサーをつとめた時

第58回奈良日仏シネクラブ例会（10/30）報告

◆◆今回とりあげたアニエス・ヴァルダ監督の長篇デビュー作『ラ・ポワント・クールト』（1954年）は今から70年も前に公開された作品で、モノクロ映像、実験的かつ芸術的な試みであることがかえって新鮮に感じられた。ヴァルダの作品の下敷きにはつねに自らの経験がある。作品の舞台、南仏セートの漁村は、ヴァルダが第二次大戦中に疎開し大学入学のためパリに出るまで暮らした場所で、ここで船上生活も体験したという。彼女の土地への愛着は強いが、自分の体験を生素材として提示するよりも、「作品」として再構成して芸術創造したいという意志が上回るようだ。ヴァルダの映画監督としての活動はこの頃から2019年に89歳で亡くなるまで実に60年以上に及ぶ。女性監督が珍しい時代、「女性」の存在を明確に意識させる作品を創り続けたパイオニアでもある。その一つに、昨年ニュープリント版で再公開された『冬の旅』（Sans toi ni loi, 1985）がある。ノーベル賞受賞で話題のアニー・エルノー原作の映画『あのこと』（L'Événement, 2021）では、主人公の少女の母親を演じている女優サンドリーヌ・ボネールが十代の時、ヒッチハイクしながら放浪する少女を圧倒的な存在感で演じた作品で、公開当時もヴェネチア映画祭金獅子賞を受賞し高く評価された。しかし世界的に「女性」の視点や立場の見直しが進む現在、ヴァルダの実践が再評価を受ける機運は高まっている。当シネクラブの前身「奈良シネクラブ」を立ち上げた橋本克己さんが字幕翻訳した作品であることも知った。映画は時を経てみることで、様々な発見がもたらされる。（浅井直子）

◆◆この映画で最も印象的であったのは、パリからやって来た倦怠期の夫婦の会話と漁村の人々の日常生活との断絶である。この周囲との断絶、私は離人症（仏：dépersionnalisation, 英：depersonalization）を思い出した。離人症とは周囲の出来事や自分自身に対して現実感がなくなり、周囲の世界とは断絶して、夢の中にいるような感じに襲われる精神症状である。激しいストレスに晒されると、誰にでも起こりうる症状である。私は大学受験の合格発表で、自分の受験番号がないことを知った瞬間、周りの世界が白黒の世界となり、ひとり本郷から渋谷まで、数時間かけて歩いたのを記憶している。どのような道を歩いたか、全く憶えていない。（角田 茂）

◆◆南フランス・セートが舞台であるという事で、青い空、紺碧の地中海、美しい風景の幕開きを想像していた私は、映画が始まると同時に、完全に錯覚していたことを知った。カラーでないのは当然のこと、アニエス・ヴァルダ26歳のデビュー作で1954年の作品である。内容は、フィクションと簡単に言うことが出来ないような作品。冒頭、ドキュメンタリー風に漁村の出来事が描かれる。並行して、一組の夫婦の愛の行方がドラマ仕立てで展開するかに思われるが、短い会話を交わしながら淡々と海辺を散歩する二人に、何かが起こりそうで表面的には何も起こらない。配布された資料によれば、ヴァルダは雑誌のインタビューに答えて、二つの物語が交錯するウィリアム・フォークナーの小説『野生の棕櫚』（The Wild Palms, 1939）をはっきり意識してこの映画を作ったと言っている。この後の活躍に繋がる貴重な作品を鑑賞することが出来た。さらに、今回のシネクラブ参加者の中には、セートやモンペリエを訪れたことがある方々も多く、南フランスの風物、習慣等、貴重な体験談も伺うことが出来たのは幸運であった。（長谷川明子）



第59回奈良日仏シネクラブ例会『ローラ』（ジャック・ドゥミ特集①）

- ❖日時：2023年2月26日（日）14:00～17:00
- ❖会場：奈良市西部公民館4階 第1・第2会議室
- ❖プログラム：『ローラ』（Lola, 1961年, 85分）❖監督：ジャック・ドゥミ ❖予約不要
- ❖参加費：会員200円、一般300円 ❖問合わせ：Nasai206@gmail.com tel. 090-8538-2300（浅井）
- ❖アニエス・ヴァルダ特集に続いて、彼女の夫ジャック・ドゥミの作品を紹介します。『シェルブールの雨傘』（1964）や『ロシュフォールの恋人たち』（1967）で知られる監督の長編第一作が『ローラ』（1961）です。舞台はドゥミの故郷でもある港町ナント。「ローラ」の名前でキャバレーの契約歌手兼ダンサーとして働きながら幼い息子イヴオンを育てるセシル（アヌーク・エーメ）。イヴオンは初恋の男性ミシェル（ジャック・アルダン）との忘れ形見。セシルは7年も音沙汰のないミシェルを待ち続けます。ナントに一時滞在中のアメリカ人水兵フランキーに口説かれたり、10数年ぶりに偶然再会した幼なじみのロラン（マルク・ミシェル）からプロポーズされても、彼女はひたすらミシェルへの愛を貫こうとします。港町ナントでは様々な人々が出会い、それぞれ夢のような時を過ごし、やがて町を去り、戻り、また旅立ちます。ミシェル・ルグランの音楽、ナントの町の「ポムレー路地」他のモノクロ映像が詩情をそえ、近年、『男と女 人生最良の日々』（2019）で80代後半になってもなお内面から輝く美しさで観客を魅了した女優アヌーク・エーメの、若き日の美しさが光ります。



第 151 回 フランス・アラカト「ラ・ロシュェルの魅力を語る」(11/27)

◆◆◆11月27日(日)、生駒セイセイビル会議室で、第151回フランス・アラカトを開催し、13名(うち一般3名)の方にご参加いただきました。講師は奈良県国際交流員のギエム・ロードさん。フランス・アラカトでは、フランス地方シリーズとも言えるほど、これまでベリー、アルザス、ヴァンデがテーマになってきましたが、今回は、ギエムさんの故郷ラ・ロシュェルとシャラント=マリティーム県について、地誌、歴史、観光名所などをお話いただきました。お話は、流暢な日本語で、また動画を交えたパワーポイントの資料が臨場感があり、分かりやすいと好評でした。老人が癒される町に見えるという参加者の感想にも同感。今は、TGVでパリ・モンパルナス駅から直通で行けるという話で、ピノー・デ・シャラントという美味しいお酒があるようなので、一度行ってみたいかなという気になりました。(杉谷健治)



ラ・ロシュェルの旧港 © Petit Bleu Photos



水族館 © Rémi Jouan



市役所 © Chris06



タチアオイ © Gilbertus

◆◆◆ギエムさんの人柄なのか、丁寧でとても分かりやすい説明で、ラ・ロシュェルの魅力が伝わってきました。お父様が撮ってくださった散歩コースの港町の風景やマルシェの様子の動画を見ながら、まるで自分がバーチャルな旅をしている気分になりました。市役所はフランスで一番古い市役所で歴史的遺産に指定されていて、現在も市民が利用しギエムさんも諸手続きをそこでしたそうです。日常生活の中で歴史を感じられる環境が羨ましく思われました。タチアオイの花が故郷の花だそうです。日本語との出会いは、15歳で地元のリセで習った時とのこと。普通、リセでは第1外国語は英語で、第2外国語はスペイン語かドイツ語ですが、ギエムさんが通っておられたリセでは、フランスでも珍しく、ヨーロッパの言語だけでなく、第3外国語の選択に中国語、日本語、ポルトガル語、イタリア語があったそうです。(藺田章恵)

◆◆◆ラ・ロシュェルへ行ったのはもう40年以上も前のこと。当時住んでいたクレルモン=フェランから、妻と一緒に、友人夫妻(フランス人男性と日本人女性)の車に同乗させてもらって訪れ、一泊しました。ただ覚えているのは、レンタサイクルで走った海岸とそこにある二つの塔だけです。その後、再訪することなく現在に至っています。私にとって「ラ・ロシュェル」という名前はむしろ、以前大阪の本町にあったレストランの名前です。知人のシェフがいたので、しばしば行きました。ギエムさんの郷土愛にあふれる話は、一挙にラ・ロシュェルを身近なものにしてくれました。故郷のお父さんが撮影されたというあざやかな画像や動画、各種資料が満載で工夫して作られたパワーポイント。町の歴史と現在、各地の見どころ、文化や料理、周辺地域、まさにラ・ロシュェルのすべてが紹介され、その魅力が伝わってきました。活発な活動を行っている日仏協会もあるとのこと。もっと知りたい町です。(三野博司)



エクス島海峡のフォール・ボワヤール © Patrick Despoix

◆◆◆Merci à tous d'être venu assister à ma présentation sur La Rochelle et la Charente-Maritime. Je tiens à remercier l'association franco-japonaise de Nara de m'avoir donné l'opportunité de vous parler de la ville et de la région où j'ai grandi. J'espère que cela vous aura plu et donné envie de découvrir, ou de redécouvrir, cette belle région. J'ai, en effet, été ému d'apprendre que certains d'entre vous avaient déjà été à La Rochelle. J'ai également beaucoup apprécié échanger avec vous, et j'ai même appris des légendes que j'ignorais grâce à vous.

ラ・ロシュェルとシャラント=マリティーム県についての私の報告にご出席くださった皆様にお礼申し上げます。私の育った町や地方について話す機会を提供いただいた奈良日仏協会にも感謝したいと思います。私の話がきっかけとなって、この美しい地方を発見、再発見したいと思ってもらえたら嬉しく思います。何人かの方はすでにラ・ロシュェルに行ったことがあると知って、感動しました。また、皆さんと意見交換できたこともとてもよかったです。おかげさまで私の知らなかった伝説を教えてくださいました。(Guilhem Laude ギエム・ロード)

美術クラブ第6回例会「南城さんのアートスタジオでの忘年懇話会」報告(12/24)

《美術を愉しむ～目から鱗の感動を》

◆◆◆クリスマス・イヴの日、南城さんのお家に、会員 10 名、一般参加 1 名の 11 名が集まり、南城さんのお話を聴いたあと、ヴァン・ムスーで乾杯、忘年懇親会を行いました。南城さんのお話では、日本、西洋、そして中国の美術にいたるまで、線の美術と面（色彩）の美術の二つの系統で見ることができるといふ絵画鑑賞法を、スライドで例示しながら教えていただきました。安井曾太郎が日本で描いた絵は背景がなく輪郭線がはっきりしているのに対し、その3ヵ月後にパリで描いた絵は、暗い背景の中に立体的な像が浮き上がるように描かれていて、まさに目から鱗。また、仏像修復に生涯をささげた新納忠之介という人や、古美術写真の道を切り開いた工藤利三郎という写真家など、奈良に知られざるが偉人が居たことを知ることができました。懇親の部では、皆さんから、ワイン、キッシュ、柿の葉寿司、ケーキなど、たくさん差し入れをいただきました。（杉谷健治）

◆◆◆東大寺転害門から東へ、正倉院宝物庫の方に向かって行くと、閑静な住宅地にとけこんで南城さんのアートスタジオがありました。扉を開けて招き入れていただいたスタジオの壁面いっぱいには飾られた画伯の作品に出迎えられて、『美術を愉しむ～目から鱗の感動を』忘年懇話会は幕を切って落とされたのでした。この地に所縁のある近代仏像修復の父、新納忠之介の業績の紹介から始まり、奈良の地をスタートした泰西美術芸術談義、それは取りも直さずスタジオの壁面に飾られた作品群の詩想を解き明かすものでした。南城画伯からのメッセージにもあったように、まさに最新作は「東西美術へのオマージュ」がごちゃ混ぜになった「美の交流」で「だまし絵」になっているところが味噌で、作品の前で時間（歴史）の経つのを忘れてしまうような感覚を覚えました。安寧と希望の令和5年の到来を願って散会となり転害門にむかいました。南城さん、ありがとうございました。（吉村公彰）

◆◆◆大変楽しい集まりでした。南城さんの講話は、プッサン vs ルーベンスに始まる線と色彩論争についての解説で興味深かったです。懇親会の自己紹介では、参加者各自の経験談やフランスとの関わりを楽しく聞かせていただきました。私はお隣りの小林安貴子さんと話が弾み、あべのハルカスでの美術クラブで鑑賞したギュスターヴ・モローのサロメの「出現」が話題になりました。ちょうど一か月前に当協会の藤村理事がホワイエ・ヴェールで催されたビゼーのオペラ「カルメン」を拝見して、カルメンやサロメに見られる「宿命の女」（ファム・ファタル）というテーマが気になっていたこともあり、小林さんとのお話が嬉しく感じられました。その小林さんは自己紹介で、近松門左衛門の浄瑠璃に出てくる心中について話されました。その時は別の世界のことと聞いていましたが、帰路のバスの中でカルメンもサロメも近松作品も「宿命の女」がテーマになっていることは同じだと、ふと気づきました。魅惑の女性に狂わされ、思い止まれず恋に突き進んでしまう男、そして迎える身の破滅。近松の心中劇が西洋物と大きく違うのは、聖書や予言、宗教や民族といった複雑さがなく、日本的で、もっと純粋な男女の愛であり、義理人情や世間のしがらみから逃れて、あの世で結ばれたいと願う一途な愛の物語です。こうして、南城さんのアトリエでの懇親会は、しばし“宿命の女”に思いを巡らせる楽しい一日となりました。（三木正義）

◆◆◆新納忠之介、フェノロサ、岡倉天心、工藤利三郎、廃仏毀釈、盧舎那仏、二月堂修二会、正倉院、小川光三、ミロのビーナス、百済観音、飛鳥仏と鎌倉仏、アングル vs ドラクロワ、プッサン派 vs ルーベンス派、白描画 vs 水墨画、中国絵画、東洋美術の遠近法、平賀源内と小田野直武、透視図法と陰影法、安井曾太郎とアカデミー・ジュリアン、浮世絵版画、印象派・後期印象派・新印象派、フォーヴィスム vs キュビズム…。この東西美術をごちゃ混ぜにし



ロマン主義・ドラクロワ（筆/色彩）vs 新古典主義・アングル（ペン/線）の風刺画

たような話の根幹は、ズバリ、線（形・輪郭、知的、平面的、白描画…）vs 色彩（光・陰影、感覚的、立体的、水墨画…）の対立構図。まさに美術における目から鱗の根源がここにあり。極寒の中お集まりいただいた皆様へ最大限のおもてなしをと、2000年に亘る美術史を40分に凝縮し、強引にお話いたしました。最強寒波と怒涛の内容に体力的にも精神的にも大変お疲れだったのではと、反省…。来年の30周年記念事業案「パリ芸術探訪」に夢を繋いでいきましょう！（南城守）

ブルースト雑感 (4)「サンザシ」のステンドグラス 浅井直子 (あさい なおこ)

2022年9月8日、エリザベス女王の崩御が全世界に伝えられました。96歳、在位期間70年214日、英国史上最年長・最長の君主でした。9月19日にウェストミンスター寺院で行われた国葬が全世界に中継放送され、そのニュースで「サンザシ」の花をモチーフにした「女王の窓」というステンドグラスが報道されたことを、後日、当協会会員の中西ツヤ子さんから教えてもらいました。中西さんはこの夏、私がフランスで撮影したサンザシの花の写真を見て「サンザシ」という植物があることを知り、そのニュースに関心をもったそうです。中西さんは植物好きで、日頃からバラの栽培を趣味にしておられ、白い花びらと赤っぽい雄蕊の「ジャクリヌ・デュ・プレ」という品種のバラが、サンザシに似ていると思ったそうです。

私のほうでは、ウェストミンスター寺院の「女王の窓」のことが気になり、ネット記事を検索してみました。すると、2018年にデイヴィッド・ホックニー (David Hockney) という当時81歳の現代アート作家がiPadだけを用いて、エリザベス女王の治世を讃えるために作った作品であることがわかりました。ホックニー氏はインタビューに応じて「作品の目的は女王を祝すること。だからイギリスの風景でもっとも祝賀的なモチーフは何かと考えたんだ。その結果、サンザシが花開く瞬間を思いついた。ほらなんていうか、サンザシが、まるで田園地帯に降り注ぐシャンパンみたいに見えるだろう？」と言っています。寺院によれば、このステンドグラスにはイギリスの田園風景に向けられた女王 (当時92歳) の喜びと思慕が表現されているそうです。(2018年10月4日の「ヴォーグ・ジャパン」の記事より)

「サンザシ」と聞くと、私はブルーストの『失われた時を求めて』の主人公の少年時代の思い出の花というのが固定観念になっていて、フランスの田園ばかりを思い浮かべていました。じっさいフランスの田舎で生垣などに用いられているのをよく目にしていました。しかしながら、もともとブルーストは、19世紀のイギリス人美学者ジョン・ラスキン (1819-1900) の著作を通じて、サンザシがフランスの大聖堂の彫刻のモチーフになっていることを知り、インスピレーションを受けていました。

サンザシのフランス語は「オベピン *aubépine*」、*「エピン・ブランシュ *épine blanche*」、英語は「ホーソーン *hawthorn*」、*「五月の花」*を意味する「メイフラワー *mayflower*」です。かつてはヨーロッパ各地で、5月1日に古代ローマの祭に由来する「五月祭」が、春の訪れを祝う行事として開催されていましたが、近年でもイギリスのある村では、野山で摘んできたサンザシが「五月の花」として家の戸口に飾られて魔除けにされているそうです。文化の基層に森の生命力を得て豊穡を願うというキリスト教以前の古い信仰があると言われています。*

2022年秋、サンザシのステンドグラスの存在を知ったことをきっかけに、イギリス文化の奥深さに気づくと同時に、ブルーストのサンザシの描写へのイギリスの作家たちの影響にあらためて思い至りました。19世紀の英国人作家ジョージ・エリオットの小説『フロス河畔の水車場』(1859)を、ブルーストは青年期に愛読し深い共感を寄せていました。主人公の少女マギーは、サンザシや様々な植物が茂っているフロス河の岸辺で子供時代に兄と遊んだ思い出を、かけがえのないものを感じています。『失われた時を求めて』の主人公が少年時代に過ごした「コンブレー」の植物に対する思い出が、大人になって無意志的記憶として蘇ったときの感情の源泉には、このイギリスの田園小説からの影響が認められます。

その後、ステンドグラスの作者ホックニーは、若い頃からブルースト読書を自らの作品創造に生かしてきた芸術家であることを知りました。彼が「女王の窓」制作の下準備で写生したのはイギリスの田園地方のサンザシですが、その心はブルーストの文学世界からの啓示によって培われているのではないかと想像してみると、この作品の鑑賞に奥行きが出てきます。自然の中に咲く花や樹木を見ていると心がなごみ気持ちが豊かになりますが、自然をデザイン化した現代アートの作品がウェストミンスター寺院という伝統ある教会に飾られることで、新たな意味や文化の融合が生まれます。2023年の今年も、植物を通じて思いがけない発見や喜びがもたらされることを予感しています。



The Queen's Window by David Hockney Westminster Abbey, Scala Arts & Heritage Publishers, 2020

17 世紀科学革命とデカルト

角田 茂 (つのだ しげる)

Le bon sens est la chose du monde la mieux partagée. 良識はこの世で最も公平に分配されているものである。
ルネ・デカルト (René Descartes: 1596-1650) 著『方法序説 (Discours de la méthode: 1637)』より

古典力学は、17 世紀に確立された。ガリレイ (Galileo Galilei: 1564-1642) は物体の落下実験を通し、加速度概念を物理学に導入した。デカルトは、座標軸を用いた解析幾何学を創始した。最終的には、ニュートン (Isaac Newton: 1642-1727) が、万有引力の発見と微積分法の導入により古典力学を完成させた。この時、人類は初めて、惑星の位置を時間的・空間的に予測できるようになった。

英国の歴史学者、バターフィールド (Herbert Butterfield: 1900-1979) は 17 世紀における科学革命を人類史上、画期的なものとして、著書『近代科学の起源 (The origins of modern science: 1949)』の中で、17 世紀科学革命 (the seventeenth century scientific revolution) という名称で表現した。以後、科学史の領域では、17 世紀科学革命という言葉が定着した。この革命により、神中心の宇宙論は、機械論的・数学的な宇宙論に変わり、研究制度としての学会が成立した。1660 年に誕生した英国王立協会 (Royal Society) の誕生はその代表的なものである。学会で議論され、学術雑誌に発表された実験結果は、パリで行われた実験でも、ニューヨークで再確認できるようになり、近代科学の土台がこの時期に確立された。



デカルトはフランス中部トゥーレーヌ州 (現在: アンドル=エ=ロワール県) のラ・エーで法服貴族の家庭に生まれた。父はブルターニュ高等法院の評定官である。1606 年から 8 年間、イエズス会のラ・フレーシュ学院で、ギリシア・ローマの古典文化からルネッサンスの人文主義に至るまで広く学んだ。その後さらに、ポアティエ大学で 2 年間、法学と医学を学んだ。

1618 年にはオランダに行き、ナッサウ伯マウリッツの軍隊に志願兵として入隊するが 1 年足らずで退役する。その後、ヨーロッパ各地を転々とするが、1628 年、オランダに永住することを決意する。オランダの独立が正式に承認されるのは、1648 年のウエストファリア条約の時であるが、当時のオランダは、すでに海外貿易で繁栄する共和国であり、言論の自由と出版の自由が認められる近代市民社会であった。イギリス反体制派の清教徒、ピルグリム・ファーザーズも、一度このオランダに亡命し、この地で準備をしてから、メイフラワー号で 1620 年、北米プリマスに上陸している。

歴史に残るデカルトの仕事は、ほとんどオランダ滞在 20 年間のものである。科学者として彼を有名にさせたのは、解析幾何学 (géométrie analytique) の創始者としてである。これにより幾何学図形が、座標軸 (coordonnées cartésiennes: デカルト座標) を導入した数式で表現可能となり、惑星の運動を数式で表すことができるようになった。この解析幾何学があったからこそ、ニュートンは、微積分法を考案し、ケプラーの 3 法則を数学的に証明することができた。

デカルトが、オランダ移住を決意した頃、イギリスのウィリアム・ハーヴィー (William Harvey: 1578-1657) は、心臓が単なるポンプであることを実証し、『動物における心臓と血液の運動に関する解剖学的研究 (Exercitatio anatomica de motu cordis et sanguinis in animalibus: 1628)』を発表した。この血液循環論により、心の在処が心臓ではなくなった。この理論に傾倒したデカルトは、ハーヴィーの論文を読みながら、オランダで動物の解剖を何度も行っている。最終的に、その成果は動物機械論、人間機械論へと発展していく。また彼は、精神と身体とを互いに独立した実体として区別し、心身二元論の立場をとって、松果腺での統合 (l'union de l'âme et du corps dans la glande pinéale) を考えた。現在、松果腺は松果体 (仏: épiphyse, 英: pineal body) と呼ばれ、その機能としての精神と身体との統合は否定されたが、精神身体医学 (médecine psychosomatique, psychosomatic medicine) やその対象とする心身症 (maladie psychosomatique, psychosomatic disease) という言葉が使われていることは、現代の臨床医学が、デカルトの心身二元論の上に構築されていることを物語っている。

晩年のデカルトは 1648 年、2 回目の帰国時、パスカル (Blaise Pascal: 1623-1662) と会い、水銀柱による大気圧の測定について話をしている。同年 3 回目の帰国時、デカルトはフランス宮廷から終身年金を与えるという約束を受けたが、しかし、フロンドの乱でその話は無になってしまった。その後、一時オランダに戻るが、1649 年、女王クリスティーナの招きによりスウェーデンに移住し、1650 年ストックホルムで亡くなった。

パリで開催された食品展示会 SIAL（シアル）に参加して

林 薫子（はやし かおるこ）

2022年10月、パリで2年ぶりに対面方式で開催された SIAL（シアル）という食品展示会に参加しました。フランスの食品だけでなく世界中の食品が出展し、世界のスーパーやデパートのバイヤー、レストランや食品業界関係者が新しい食品を探しに来場し、来場者は世界から約 26 万 5 千人、約 40 万製品が出展されました。展示会場の広さは約 25 万㎡で、日本の大型展示会場である幕張メッセの3倍くらいの広さです。とにかく巨大な食品見本市で、その活気、広さに圧倒されました。

私は奈良の醤油メーカーの出展サポートのために参加しましたが、この展示会で世界の新しい食品を知ることができましたので、展示会で私が感じた食のトレンドをまとめます。



フランス製プラントベースのチキンナゲット。美味しかった。

1. 大量生産品から家族経営企業の伝統のレシピ、地産地消へ

この展示会では新製品ばかりでなく、すでにスーパーなどで販売されている大手メーカーのお菓子やジャムなども展示されていましたが、それよりも特に目立ったのは、地元で伝わる製法やレシピで地産地消を活かした中小家族経営メーカーの食品でした。パッケージも可愛く、「家族 3 代に伝わる秘伝のレシピのジャムやトマトソース」などが売り文句となっていました。

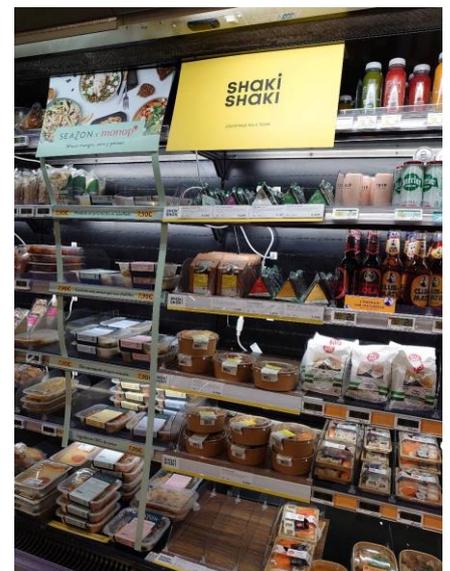
2. 選択肢が増える「肉類」

骨付き生ハムのイタリアのパルマハムや、スペインのハモンイベリコの展示ブースの横に、「植物由来ミート」（大豆を使用したチキンナゲットとか、ハンバーグとか）が当たり前のように陳列されていて、広い意味での肉類（ミート）のなかで、生ハムも植物由来も自由に選べる時代なのだと実感しました。特にフランス製の植物由来ミートのチキンナゲットを試食しましたがとてもジューシーで美味しくて、「植物由来でカラダにいいからマズイなんてあり得ない。僕たちフランス人がつくる食品だからまず美味しくないと意味がない」と自信をもっていたのがとても納得できました。

3. 日本食がフランスの日常食へ

今回の展示会では、日本の食品として和牛、日本茶、味噌、醤油、昆布などが展示されていました。ただ展示会場では日本食はどちらかというと高級品カテゴリーでしたが、パリ市内のスーパーにいけば、サンドイッチやサラダ売り場の横にフランスでつくられた手巻きおにぎりや Bento（からあげ弁当や焼きそば弁当）が販売されていて、フランス人のランチメニューのひとつとして日本食が定着しています。その日常食の日本食をきっかけに日本の食品をどのように販売していくかが今後の課題だと思いました。

今回、巨大食品展示会で新しい食を感じましたが、パリ滞在中はホテルの近所のマルシェで購入した新鮮な野菜や果物を味わったり、普通のブランジュリーで買ったバゲットの味にあらためて感動したり、最終的にはフランスの自然な味を再発見したパリ滞在となりました。



フランスのスーパーで販売される手巻きおにぎりや Bento（弁当）。

日本の伝統文化に魅せられて新境地を切り開いたアーティスト

西崎美也子 (にしぎき みやこ)

昨年 12 月のある日、大学時代の同級生から「FIGARO JAPON 2 月号にソレンヌさんのパリの自宅が掲載されてるよ！」というメールが入ってきました。「ソレンヌさん」というのは、私が奈良市役所職中にベルサイユとの姉妹都市交流で知り合ったアーティストのソレンヌ・エロワ (Solène Eloy) さんのことです。



FIGARO JAPON に掲載されたソレンヌさんの記事

3 年前、その友達と一緒にパリ旅行をした際、彼女のモンマルトルの自宅に泊めていただきました。その自宅が日本の雑誌に《パリジェヌが暮らす部屋》として、4 ページにわたって特集されているのです。早速書店に走り、FIGARO を購入しました。確かに私たちが泊まったお宅が詳しく紹介されていました。この家は有名なキャバレー「シャ・ノワール(黒猫)」だった建物。さすがアーティスト、紹介されているとおり、古い建物をとても上手くりノベーションして、素敵に住みこなしておられました。

彼女は 2006 年に奈良市とベルサイユ市との姉妹都市提携 20 周年を記念する「ベルサイユ美術展」と、2010 年「姉妹都市絵画写真展〜トレード ベルサイユの光と影」で来寧したアーティストで、当時はまだ自分の方向性を探って、試行錯誤しているような印象でした。し

かしその後、壁面装飾や壁紙の制作に的を絞ったようで、4 年前にパリに引っ越して自分のスタジオを持ち、精力的に仕事を展開しています (*l'Atelier du Mur*: www.atelierdumur.fr)。彼女の作風には、日本に来られた時に得たインスピレーションが影響しています。今回の記事のことを彼女に連絡したところ、次のようなメッセージをいただきました。近い将来、また日本に来て学びたいそうです。その折には奈良にお招きしたいと思っています。

「日本のインスピレーション」

私はイタリアのフレスコ画を専門としており、テクスチャ、金箔、真珠の層を混ぜ合わせてモダンなスタイルで使用していますが、技法は同じで非常に伝統的な手法です。奈良に来たとき、伝統的な技術を現代的に取り入れた日本の仕事の仕方に刺激を受けました。私は日本の職人を尊敬しています。忍耐力、素材への情熱、完璧な仕事をしたいという願望を理解しています。それが、新しい世代の私たちが到達しようとしているものです。

私は自分を芸術家であると同時に、職人でもあると感じています。幸運なことに、最近高級品業界のインテリア・デザイナーのもとで働くことができました。彼らの先鋭的なプロジェクトのために自分のスタイルで仕事をさせてもらったので、さまざまな技術を向上させることができました。今は紙、ガラス、さまざまな素材に取り組んでおり、最近では日本のインスピレーションから得た金箔紙の壁紙を開発しています。私はできるだけ早く日本に戻って学びたい、できれば、今年か 2024 年に来られることを願っています。日本は私にインスピレーションを与えてくれます。私は日本の自然、芸術、建築、食べ物が好きです。かつて 2 回日本に来られたことをとても嬉しく思っています。 (英語でいただいたメッセージ。私の拙訳です。)

彼女は最近パリの高級レストラン「タイユヴァン」(Taillevent) の壁面装飾も手掛けたそうで、2024 年の日仏協会創立 30 周年記念事業「パリ藝術探訪」が実現した折には、是非皆で行ってみましょう！



ソレンヌさんの壁紙製作の素材

ソレンヌさん

「三木康子ピアノ・リサイタル 時空を超え～No.8」を終えて 三木康子 (みき やすこ)

2022年11月5日、「三木康子ピアノ・リサイタルー時空を超え未来に響く音を求めてーNo.8」をザ・フェニックスホールで開催した。コロナ禍の中であったが、多くの方々にお越しいただき感謝している。今回のリサイタルのプログラムは、モーツァルト作曲『幻想曲 K.397』、ショパン作曲『12の練習曲 Op.25 (全曲)』、尾高惇忠作曲『ノクターン』、ラフマニノフ作曲『ピアノ・ソナタ第2番 Op.36』、アンコールはショパン作曲『ノクターン Op.9-2』とドビュッシー作曲『喜びの島』であった。

リサイタルの所感を述べたいと思う。私は18年前からこのテーマでリサイタルを続けてきた。バロック、古典、ロマン、近現代、邦人現代作品をそれぞれ取り上げ、時代や国を超え未来に響く音を求めた。その結果、今回演奏しながら感じたことは、私の弾くピアノの音が聴衆の方々と共に共有していることであった。

プログラムの中で特に印象に残り、沢山の方々より感想や賞賛をいただいたものの中に、フランス音楽のアカデミズムの伝統を学ばれた尾高惇忠作曲『ノクターン』があった。氏の最後のピアノ作品である『ノクターン』は、無調、様々なモチーフや旋法、神秘的な和音などが、柔らかな響きや荘厳さをもたらし、聴衆を天上の世界へと導く名曲である。心を込めて演奏した。

プログラム最後のラフマニノフ『ピアノ・ソナタ第2番』については、曲の意図するところを作曲者は明らかにしていない。作曲者の様々な楽曲を分析し生涯をとおり音楽観、人間性等についても思案した。演奏中、聴衆の方々と一糸乱れず緊張の中で楽曲が進んでゆくのを体験し、大きな感動を得た。

ブラボーと拍手喝采。やはり音楽は、時代を超え国を超え、すべての人間の美しさや憧れ、喜びや悲しみや怒りをも共有しているのである。ピアニストとしての自覚と未来への抱負を確認したリサイタルであった。



シャルダンの眼

神澤 透 (かんざわ とおる)

ジャン・シメオン・シャルダン (Jean-Baptiste Siméon Chardin, 1699-1779) は、ロココ美術の時代に生きながら、華やかな宮廷風俗画ではなく、中産階級の日常的な生活、身近な静物画や家庭内の情景を描いた画家です。このシャルダンの『赤エイ』を初めて見たのは、美術百科をめくっていた小学生の時でした。この絵のことを覚えていたのは、母親が「おぞましい絵」といって見るのも嫌がっていたからです。その後ルーヴル美術館で実物を見ましたが、写実的で何かを訴えかけてくるようで感動したことを覚えています。とはいえ、当時はその感動を言葉にすることは考えてもいませんでした。

後年、『失われた時を求めて』の作者マルセル・プルーストが作家になる前の20代前半にこの絵を描写した文章に出会った時、ぼくは戦慄のような感動を受けました。

自分が身をくねらせて泳いだ海のようにいまも新鮮な、奇怪な怪物の赤えいが一尾つるされている。それを見ると、赤えいがその恐ろしい目撃者だった海の風や時代の不思議な魅力が、美食の欲望とまざりあって、なにか動植物園の思い出のようなものが料理屋の味のなかをよぎってゆく。赤えいは腹をさかれていて、あなたは赤い血や、青い神経や、白い筋肉で染められた、繊細で、壮大なその建築、まるで多彩色の大聖堂の内陣のようなその建築の美しさを楽しむことができる。(保苺瑞穂『プルースト印象と隠喩』ちくま学芸文庫より)

プルーストは、読む者に絵画を映像として浮かび上がらせ、一枚の絵から物語を紡ぎ出そうとします。現在日本で、対象をリアルに描く写実絵画がブームともいえる盛り上がりを見せています。その作成には並々ならぬ「観察眼」だけでなく、「視点」すなわち描写しようとする者の「眼」の動きが求められるでしょう。

ぼくもいつか自分の気に入っている絵をもとにして、文章を綴れるようになりたいと思っています。



ジャン・シメオン・シャルダン《赤エイ》、1727-1728年頃、114.5×146cm、油彩・カンヴァス、ルーヴル美術館

第 152 回 フランス・アラカルト「多言語国家スイスでの暮らし」のご案内

❖ 日時：2023 年 3 月 18 日（土）14:30～16:30 ❖ 会場：生駒市コミュニティセンター 2F 201・202 号室
 ❖ 参加費：会員 500 円、一般 1,000 円 ❖ 申込先：sugitani@kcn.jp TEL: 090-6322-0672
 ❖ ゲスト：トリスタン・クレマン（Tristan Clément）さん：フランス生まれスイス育ち。2015 年、州立ジュネーブ大学の日本学科と英文学科に入学。2017～18 年、東北大学に 1 年間交換留学。2021 年 10 月、香芝市役所に国際交流員（CIR）として着任しました。（※当日は日仏二か国語でお話をさせていただきます。）

❖ クレマンさんからのメッセージ：Bonjour à tous ! Hallo Zäme ! Buongiorno a tutti ! 今回はフランスだけでなく、フランス語圏の国の一つとしてスイスを紹介する機会をいただいて、私の故郷を皆さまに紹介するのをとても楽しみにしております！スイスのフランス語圏にはレマン湖のほとりのローザンヌとジュネーブなど、素敵どころがいっぱいあります。もちろん、私が生まれたフランスの都市ブザンソンと、6 年間住んでいた小さな村ブジェも、紹介するのを楽しみにしております。私はフランスでも、スイスでも、小さな村で育った田舎っ子です！フランスとスイスの田舎の、のどかな雰囲気を一緒に見てみませんか？



第 58 回 奈良日仏シネクラブ例会案内（詳細は本誌 4 頁をご覧ください）

❖ 日時：2023 年 2 月 26 日（日）14:00～17:00 ❖ 会場：奈良市西部公民館 4 階 第 1・第 2 会議室
 ❖ プログラム：『ローラ』（Lola, 1961 年, 85 分）❖ 監督：ジャック・ドゥミ ❖ 予約不要

《2022 年度第 6 回理事会報告》…事務局 日時：2023 年 1 月 12 日（木）15:00～16:50。場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、高松、菌田、藤村、杉谷、中辻、喜多、三木。議題 1. 会員数確認。議題 2. 11/17 理事会後の活動：(11/27) 第 151 回フランス・アラカルト「ラ・ロシュルの魅力を語る」、(12/24) 美術クラブ特別例会。議題 3. 今後の行事：(2/26) 第 59 回シネクラブ例会『ローラ』、(3 月) 第 151 回フランス・アラカルト「香芝市交流員クレマンさんを迎えて」、今後の行事案。議題 4. 年次総会：懇親会中止、お茶とケーキで意見交換。(1/23) 総会案内発送、式次第と概要・2022 年度活動報告と決算報告・2023 年度役員改選・2023 年度活動計画・予算等確認。議題 5. Mon Nara 通信 No.14、Mon Nara No.301 2/20 発送予定。議題 5. その他：講座表掲載基準、音楽クラブ案。次回理事会 3 月 16 日（木）15:00～16:30「菜宴」にて。



編集後記 ☆「福寿草」はキンポウゲ科の多年草で冬から早春（1 月～3 月）に黄金色の花を咲かせます。花の少ない冬に寒さに耐えながら春の到来を待つ花として知られています。今年の冬は例年になく厳しい寒さが続いたせいかわ福寿草を思い浮かべることが度々ありました。花言葉は「幸福」「祝福」、花の咲く時期が長いことから「長寿」を象徴する花ともいわれ、いかにも日本的な名前の植物です。☆福寿草のフランス語名は「adonis アドニス」。ギリシャ神話の美少年の名前に由来し、イノシシの牙に突かれた時の傷から出た血に喩えられた赤い花は、「血の雫」を意味する「Goutte-de-sang」とも呼ばれています。☆同じ植物が東洋と西洋で異なる謂れと色をもつことが興味深く思われ、いつかフランスでまだ見ぬ赤い福寿草に直面する日は訪れるのだろうか…、と想像してみました。☆コロナ禍、戦争、物価高。物理的にも精神的にも日常生活が脅かされる日々が続く、なかなか先が見えてきませんが、寒風のある日、小さな黄色の花を咲かせている福寿草を見つけた時、嬉しい気持ちになりました。（N. Asai）

◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
 ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2023 年 6 月号は **5 月 31 日** が原稿締切日です。
 ◆会員のみなさまで「**Mon Nara**」（2 月、6 月、10 月発行）又は「**Mon Nara 通信**」（4 月、8 月、12 月発行）に**チラシ同封を希望される方は**、1）内容がフランスに関わるもの、2）本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2023 年 2 月号 numéro 301

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司